

ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓からさす光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらとひっくり返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べてこいと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見つからないので、私は二度も三度も雑誌を借るかえなければなりません。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向こう側から小さな声で私の名を呼ぶ者があります。私はふと目を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近づけました。ご承知のとおり図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をするわけにゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通のことなのですが、私はそのときに限って、一種変な心持ちがしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待ってあげてもいいと答えました。彼は待つていると言ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があつて、談判でもしに來られたように思われてしかたがないのです。私はやむをえず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち着き払つてもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すとともに、Kと図書館を出ました。

二人は別に行く所もなかったので、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。そのとき彼は例の事件について、突然向こうから口を切りました。前後の様子を総合して考えると、Kはそのため私をわざわざ散歩に引つ張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際の方面へ向かつてちつとも進んでいませんでした。彼は私に向かって、ただ漠然と、どう思うと言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛のふちに陥つた彼を、どんな目で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認めることができたと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくをはばかり弱く出来上がつてはいなかったのです。こうと信じたら独りでどんどん進んでいくだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の内に彫りつけられた私が、これは様子が違つたと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向かつて、この際なんで私の批評が必要なのかと尋ねたとき、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そうして迷っているから自分で自分が分からなくなつてしまったので、私に公平な批評を求めるより外にしかたがないと言いました。私はすかさず迷うという意味を聞きただしました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰まりました。彼はただ苦しいと言つただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴き切つた顔の上に慈雨のごとく注いでやったか分かりません。私はそのくらいの美しい同情を持つて生

まれてきた人間と自分ながら信じています。しかしそのときの私は違っていました。